

各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

令和3年度中学入試

[前期B入試]

国語科 問題

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、表紙を含めて24ページあります。
試験中に、印刷が見づらかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
- 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[前期B入試] 受験番号 _____

金蘭千里中学校

①主人公のキキは十四歳さの魔法まほう使い。といつてもほうきで空を飛ぶとしかできません。黒猫くろねこのジジはキキとだけおしゃべりができま
す。キキは一年前に魔女としてひとり立ちするために、コリコの町にやつてきて宅急便屋をひらいています。次の文章を読んで、後の
問い合わせに答えなさい。

朝から雨が降りつづいています。

「ジブジブジブって、まつたく、いくじなしの女の子みたい」

キキは目の前にさがつて、いつまでたつてもかわかない洗濯物せんたくものをにらんでいました。そばでジジがしきりに手で顔をなでています。
「でもぼくは雪が降るよりいいな」

「上に行つてあついお茶でも飲もうかな」

キキが立ちあがりかけると、ルルルルーと電話が鳴りはじめました。

受話器をとると、

「あの、えーと、そちら魔女のおとどけ屋さん？」

と、細くて高い声がきこえてきました。

「はい、そうです」

「あの、えーと、えーと、ちょっとおとどけ、おねがいできますかしら」「はい」

キキは部屋のすみにおいてあるほうきを、ちらつと自信のない目で見ました。

「こちら、えーと、よめな通り九十九番地ですけど……ほんとうにいらしてくださいでしょ」

「はい、ええ」

「あのー、あのー、雨でも来てくださるんでしょ」

「は、はい。よめな通りですよね」

「じゃ、待つてますよ」

キキは窓から空を見あげました。

「雨、雨、ふー」

①キキがため息をつくと、

「このとこ、うちにばつかりいるんだから、外の空気をすこしはすわなきや。キキ、行くのいやなの？」

「いやじゃないけど、ほうきが……」

ほうきはりんごを運んだときこわして、そばにあつた枯れ枝で、まにあわせにつくつたまんまでした。はやくつくりなおさなくちゃって思いつつ、きょうまで、のばしのばしにしていたのです。

「じゃ、歩いていくの？」

「うん……」

「まつたく、イジイジして、Aって自分のことじやないの？ よめな通りつて遠いよ。それでもこの雨の中歩くつもり？」

「ううん、なんとか飛んでく。さ、行こ」

キキはほうきをかかえると、戸口にむかいました。

ほうきはどことなくたよりなく、ときどき、よろろとへんなゆれかたをします。

よめな通りはコリコの町のぎりぎりはずれにありました。家と家の間がだんだん遠くなつて、最後にぽつんとあるのが九十九番地でした。

玄関のベルを押すと、ひきずるような足音がして、戸があきました。小さなおばあさんが、顔をいつしょうけんめい上にあげてキキを見ました。

「よく、来てくれたわね。あら、あら、こんなにぬれてしまつて。さあ、さ、どうぞ」

いわれるままにはいると、家の中は、なまあつたかい湯気がBたちこめています。

「外は雨で、うちの中は霧か……」

ジジはつぶやいて、小さくくしゃみをしました。

窓という窓は湯気でくもつて、どこかよその世界にすっぽりとはいりこんでしまつたような感じです。

おばあさんは、そばのボール紙の箱を開けて、赤いリボンのついた靴くつを取り出しました。

「あのー、あのーね、これをあそこへとどけていただきたいのよ」

おばあさんは体をねじつて、湯気でまつ白になつてているガラス窓のむこうを指さしました。

「あそこって、すぐそこ？」

キキはきました。

「そ、そうよ、ちょっと、このくもつている窓ふいてみて、見えるから」

おばあさんはうなずきました。キキはいわれるままに窓に近づき、手のひらでガラスをこすると、ガラスはさつとすきとおり、おばあさんの家の垣根と、そのむこうにつづく林が見えました。すずめが一羽、おどろいたように飛びたちました。

「大きな家が見えるでしょ。あそこはすかんぽ通りっていうのよ。玄関にのぼる階段に、ちっちゃな女の子がすわっているでしょ。名前はコダマちゃんっていうの。②その子にこの靴、とどけてやつてほしいのよ」

キキはなんと返事していいかわかりませんでした。どう見ても、女の子どころか、家も見えません。葉をつけた木と、はだかの木がまざつた、こんもりとした林、そしてそこに消えていく一本の道だけです。でも、目の前のおばあさんはにこにこ笑いながら、あたりまえのように話をしています。

「あの林のむこうですか」

キキは C きました。

「ううん、ほら、見えるでしょ、うさぎの彫刻のついた階段にすわっている女の子」

キキはだまつて首をふりました。

「あら、わかんないの。うさぎの彫刻よ。それ、ミコちゃんつて呼んでたの」

おばあさんはふしぎそうにきました。キキは申しわけなさそうに、もう一度首をふりました。

「おかしいことねえ」

おばあさんは体のむきを変え、こんどはさつきの窓とは反対側の窓を、ブラウスの袖できゅつきゅつとふきました。

「ほら、見えるじゃないの、ちゃんと」

「あら、こっちだつたんですか」

キキはそばからのぞきました。たしかに家が見えました。でも、それは遠くにぽつんとたつてある家です。窓にはカーテンがさがつているようです。階段なんてありません。女の子だつてすわつていません。雨が降つてます。

③キキはなんだかこわいような気持ちになつて、体をこわばらせました。

「ね、見えるでしょ」

おばあさんはさも安心したというように、大きく息をつくと、そばのソファにすわりました。

「あのコダマちゃん、悲しそうな顔をしてたでしょ。だって、とってもわるいことしちやつたんですもの、とっても④後悔しているのよ。

四日前、おねえさんのコズエちゃんの八つのaおタンジョウ日bだったのよ。それでコズエちゃんは、おとうさんからbおイワaに赤い靴をもらつたの、かかとがちょっとぴり高いのよ。ほら、この靴と同じもの。おとの靴みたいで、とてもすてきでしょ」

おばあさんは手にもつた赤い靴を何度もなでました。

「コダマちゃんはうらやましくってねえ。『おねえちやん、ちょっと、ちょっとだけでいいから、あたしにもはかせて』って何度もたのんだのよ。「でも『だめ、あたしんだもん』って、コズエさんはうしろにかくして、見せてもくれないの。けんかになりそうになつてね、そしたらおとうさんが、『ほらほら仲よくおし、これから海岸通りのレストランでおイワいの食事をしよう。はやくしたくをして、おまえたちは階段とここで待つてなさい』。するとコズエちゃんは、びょんびょんはねながらいうじやないの。『あたし、あたし、新しい靴はいていくんだ、いーくんだ、いいでしょ、いいでしょ。コダマちゃんにはあたしの古い靴かしてあげるね』って。コズエちゃんとコダマちゃんは一つちがいなもんだから、足の大きさはだいたい同じなの。ふたりは大きいそぎでよそいきの洋服を着て、靴をはいて外に出たの。コズエちゃんは新しい靴がうれしくって、玄関の階段をのぼつたりおりたり。コズエちゃんのちょっと高いかかとがいい音してさ。まねしてコダマちゃんもやつてみるんだけど、古い靴でしょ、へんな音しかでなくて、

『おねえちやん、ちょっとだけその靴はかせて』

コズエちゃんはもう一度たのんだのよ。でもコズエちゃんは『だめーっ。あたしの靴だもーん』って、いじわるいうの。

『さ、行こうか』

まもなく、おとうさんとおかあさんがうちから出てきて、みんなそろつて電車にのつたの。これから食べるごちそうの話をしながらうきうき。コズエちゃんはおとなのみたいに足を組んですわって、つんと靴をみせびらかして、コダマちゃんの目の前でルンルンつてふつてね。いつしょに赤いリボンもゆれて。コダマちゃんはそれをちらりちらりと見ていたかと思うと、ちょうど大川の橋の上に電車が来たとき、⑤その靴のかたつぽをコズエちゃんの足からひつぱつて、そのまま電車の窓からぼーん……投げちゃつたの。靴はさーっと赤い線みたいになつて、下の大川に落ちていつたの。コズエちゃんはものすごい声で泣きだした。コダマちゃんもものすごい声で泣きだし。おかあさんのおこつた声。おとうさんのおこつた声。ふたりの泣く声。電車の中は大きわぎ。

その日のおたんじよう日のごちそうはもうさんざんだったわ。コズエちゃんは『あたしのくつー、あたしのくつー』って、しゃくりあげるばかり。コダマちゃんは靴を窓から投げたとたん、とっても自分がわるい子だつて気がついたのね、だからやつぱりしやくりあげるばかり

り。つぎの日、コダマちゃんは靴をさがしに、ひとりで橋まで歩いて下をのぞいてみたの。でも見つかなくて。そのつぎの日も行つて、でも、やつぱり見つからなくてね」

おばあさんは、さつき湯気をふいた窓のほうをむくと、何かをさがしてでもいるように、うろうろとのぞきこみました。ショールをまいた肩が急にしぶんで、おばあさんが小さな女の子の姿に見えました。キキはどきっとして息をつきました。

「おばあさん」

キキは思わず声をかけました。

「あの子つたら、いつまであそこにすわっているつもりかしら、かわいそうに……」

とおばあさんはひとりごとをつぶやくと、急にキキのほうをふりむきました。

「そうなのよ、あたし、今朝、買い物に行つたらね、大通りのお店でコズエちゃんのと同じ赤い靴を見つけたのよ。これよ」

おばあさんはさつきの靴をさし出しました。

「ね、魔女さん、はやくコダマちゃんにもつてつてあげてよ。コズエちゃんに返すようにいってあげて。あの子、ずーっとずーっとがつぶれるほど後悔しているんですけど。あの子の心から、悲しいできごとを消してやつてちょうだいな」

「はい」

キキはうなずいて受けとりました。

おばあさんは追いかけるようにいいました。

「住所はすかんぽ通りよ。時計台の東側、七番地。たのみましたよ」

「はい」

キキはドアを開けて、外に出ました。キキは十歩ばかり歩いて立ち止まりました。

「どうすんの、とってもへんだよ」

ジジがキキを見あげていました。

「しーつ、きこえるでしょ」

「だつてさあ、⑥あの、おばあさん、かんちがいしてるんじゃないの。遠いこと近いことがいつしょになつてるみたい」

「でも、行つてみましようよ、時計台まで」

「すかんぽ通りつて、いつたいどこにあるんだろ。きいたこともないよ」



ジジは足もとの水たまりをいやがついて、キキにとびついてきました。

雨はもう気にならないほど、こやみになつていました。キキは赤い靴を両方のポケットに一つずつ入れて、飛びあがりました。そして時計台まで来ると、ゆっくり一回まわって、その東側におりていきました。このへんはdキユウシガイと呼ばれ、古い町並がのこっています。細い道が多く、建物はどこかすこしづつかたむいて見えました。キキは道のeヒヨウシキを見ながら歩きました。でもすかんぽ通りなんていう変わった名前はどこにもありません。それちがう人にもきいてみました。みんな、「さあー」とEをかしげるばかりです。もしかしたら、すかんぽ通りは、おばあさんの夢の中の通りなのかもしません。さがしても、見つけることのできない通りなのかもしません。キキはそばの壁によりかかりました。どうしたらしいのかわかりませんでした。なにげなく、目の前の自動車修理工場を見て、びっくりしました。そこに入り口につづく二段ばかりの階段の柱に、うさぎの彫刻がついていたのです。

「たしか……おのばあさん、うさぎの階段とかいつてた」

キキは走つて工場の中にはいつていきました。男の人がひとり、小さな事務所で書きものをしていました。

「あの、ここは前から工場だつたんですか」

キキはきました。

「ああ、そうだと思いますよ」

「でも、あの階段……うさぎの……古そうに見えるけど」

「ああ、あれは、前の建物のを利用したらしいよ」

「そう、やっぱり。じや、ここはすかんぽ通りつていうんでしょ」

「そうだよ。よく知つてるねえ。十二、三年前にむこうの通りとつなげてまつすぐにしてから、一本道通りつて名前に変わっちゃつたけど。おじょうちゃん、どこかさがしてるの？」

男の人はいました。

「ええ……いいえ……どうもありがとうございました」

キキはお札をいつて歩きはじめました。ポケットの中の靴がゴツゴツ体にあたります。

「ねえ、どうしたの、へんだねえ。へんだよ。頭ごちゃごちゃしちやうよ。ここがそうなの、おばあさんがいったところなの？」

ジジがキキのあとを追いかけながらいました。

「そうらしいの……でも遠いむかしのね」

キキはちょっとのあいだ、空を見ました。

「やっぱり、おばあさんに返しに行こう」

キキはジジに手をさしのべ、飛びあがりました。そして、ふと思いました。

「もしかしたら返すんじやなくて、⑦とどけに行くのかもしれない」

キキはドアをノックしました。ひきずるような足音がして、ドアがあき、おばあさんが笑顔を浮かべて立っていました。

「あの、この靴……」

キキがいいかけると、おばあさんはとびあがるように体をはずませました。

「あっ、その靴、どこにあったの？ あたし、さがしてたのよ。ずーっと、ずーっとさがしてたのよ。見つけてくれたのね、ありがとう」

おばあさんは子どもみたいに靴をぎゅっと抱きしめました。

キキはなんといつていいかわかりませんでした。だまつてドアをしめようとしました。でもふと、その手を止めてきました。

「おばあさん、お名前、なんておっしゃるんですか？」

「あたし、あたしはコダマつていうんですよ」

おばあさんは顔をぐいとあげて、しつかりした声で答えました。

キキはじつとおばあさんを見、しづかにおじぎをしてドアをしめました。

「ねえ、いったい、これ、どういうこと。あのおばあさん、コダマさんだつて……」

家にむかって空を飛びながら、ジジがいました。

「あのおばあちゃんはね、心の中で、むかしと今を行つたり来たりしてゐみたい。だから、あたしたちもいっしょに行つたり来たりして、たぶん、コダマさんの中の、ちいちゃなコダマさんに靴をおとどけしたのよ」

「ふーん」

ジジは息をはくと、考えるように目を上にむけました。

(角野栄子『魔女の宅急便 その2 キキと新しい魔法』より 一部改めたところがある)

(一) 波線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

- a おタンジョウ日 b おイワい c ノつた d キュウシガイ e ヒヨウシキ

(二) 傍線部 ① 「キキがため息をつくと」 とあるが、キキがため息をいたのはなぜなのか。もつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まにあわせにつくつたほうきで、雨の中をうまく飛ぶ自信がなかつたので。
イ 朝から強い風が吹き荒れ大粒の雨が降つており、外に出たくなかつたので。
ウ 雨が早くやむようにずっと祈つてしているのに、やみそうな気配すらないので。
エ 気分転換のためにお茶を飲もうとしたとたんに、仕事の電話が入つたので。
オ 遠くにある一本道通りまで、雨の中傘をさして歩いて行くのがいやなので。

(三) □Aに入るもつとも適切な九字の言葉を文中より抜き出して書きなさい。

(四) □Bに入るもつとも適切な言葉を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア びゅうびゅうと イ ひらひらと ウ しとしどと エ しんしんと オ もうもうと

(五) 傍線部 ② 「その子にこの靴、とどけてやつてほしいのよ」とあるが、おばあさんは何のためにこの靴をとどけてやつてほしいと言つてゐるのか。もつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア コダマちゃんが、とどけられた靴をコズエちゃんに返して、悲しいでき事をコダマちゃんの心の中から消すため。
イ コズエちゃんが、とどけられた靴をコダマちゃんに返して、悲しいでき事をコズエちゃんの心の中から消すため。
ウ この靴をキキが過去をさかのぼつて直接コズエちゃんにとどけて、今の自分の心の中から悲しい思いを消すため。
エ コズエちゃんが、とどけられた靴をコダマちゃんに返して、けんかする以前のように仲の良い姉妹にもどるため。
オ コダマちゃんが、とどけられた靴をコズエちゃんに返して、けんかする以前のように仲の良い姉妹にもどるため。

(六) Cに入るもつとも適切な言葉を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア きびきびと イ おずおずと ウ しみじみと エ こんこんと オ しくしくと

(七) 傍線部③「キキはなんだかこわいような気持ちになつて、体をこわばらせました」とあるが、なぜなのか。もつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雨がジブジブと降る中、人気のない一軒家がぽつんと立つ情景が不気味に思われたので。
イ おばあさんが自分たちをすっぽりとどこかよその世界に誘い込んだように思われたので。
ウ 現実には存在しないものを存在するかのように話すおばあさんが気味悪く思われたので。
エ おばあさんはニコニコと笑つているが、くちごたえは許されないように感じられたので。
オ おばあさんは何か悪い意図があつて、自分をだまそうとしているのだと感じられたので。

(八) 傍線部④「後悔しているのよ」とあるが、後悔の思いが今に至るまでおばあさんの心の中に残っているのはなぜなのか。答えとなる次の文のX・Yに入るもつとも適切な言葉をそれぞれ文中より抜き出して書きなさい。ただしXは一字、Yは三字の言葉である。

【自分のしたことがとても悪いことだと気づき、何度もXをYたが結局見つけることができず、この出来事が心の傷となつてずっと残ることになったので】

(九) 傍線部⑤「その靴のかたっぽをコズエちゃんの足からひっぱつて、そのまま電車の窓からぼーん……投げちゃったの」とあるが、なぜなのか。もつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おとうさんが「仲よくおし」とわざわざ言つてくれたのに、さらにいじわるを繰り返す姉を皆の前でこらしめたかったので。
イ 自分がもらうはずの靴だったのに、姉がだだをこねてむりやり取りあげ、さらにそれを見せびらかすことに腹が立つたので。
ウ 家族全員が外でごちそうを食べるためにおしゃれをしているのに、自分だけ古い靴をはいているのが我慢ならなかつたので。
エ 姉に何度も靴をはかせてくれと頼んだのにはかせてくれないばかりか、見せびらかすようなことをするのに腹を立てたので。
オ 姉が子どものくせに背伸びして、おとなの人みたいに足を組んですわって、つんと靴をみせびらかす態度に腹が立つたので。

(十) □・D・E にはそれぞれ体の一部を表す漢字一字が入る。自分で考えて書きなさい。

(十一) 傍線部⑥「あの、おばあさん、かんちがいしてるんじゃないの」とあるが、どういうことなのか。もっとも適切なものを次のA～

才の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遠くにいる孫のコダマちゃんが、近くに住んでいると想い込んでいること。

イ 夢の中にしかないすかんぽ通りを、現実にあるものだと思い込んでいること。

ウ 以前は存在したすかんぽ通りを、今現在もある通りだと思い込んでいること。

エ 目の前にはないすかんぽ通りを、窓から見える場所だと思い込んでいること。

オ 時計台の西側にあるすかんぽ通りを、逆の東側にあると思い込んでいること。

(十二) 傍線部⑦「とどけに行くのかもしねない」とあるが、どういうことなのか。答えとなる次の文の□・I・II・IIIに入るも

つとも適切な言葉をそれぞれ文中より抜き出して書きなさい。ただし、□Iは三字、□IIは一字、□IIIは五字の言葉である。

【おばあさんは、心の中で□Iと□IIを行ったり来たりしていく、おばあさんの中の小さな□IIIにとどけに行くということ】

②次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この頃、大学生ばかりでなく、高校生や小中学生と話をすることが多くなりました。大学の総長として大学のアケイエイに取り組むことが本務ですが、これから大学に入つてくる若いセダイのことをもつと理解しないと、将来の大学像は描けないなと思つたからです。そこで、意外な反応がありました。ぼくが「スマホを使つている人は?」と聞くとほぼ全員が手を擧げるのですが、「スマホを捨てたいと思う人は?」と聞くと、ケツコウ多くの子どもたちが手を擧げるのです。生まれたときからインターネットがあり、スマホを身近に使って、ゲームや仲間との会話を楽しんでいるように見える若いセダイも、スマホを持て余しつつあるのではないか、と感じたのです。

A スマホへの漠とした不安の正体は何なのか。この問い合わせる前に、まず、皆さんに質問をしたいと思います。

I ①日常的におしゃべりする友だちは何人くらいますか?

II ②年賀状や（注1）SNS、メールで年始の挨拶を発信しようと思うとき、リストに頼らず、頭に浮かぶ人は何人くらいますか?

いかがでしょう。ぼくが今まで学生などに聞いた限り、Iは10人くらい、IIは100人くらいまで、というのが標準的な答えです。これは、おそらく全国どこでも同じだと思います。

ぼくが、なぜこのような質問をしたかというと、今、「自分がつながっていると思っている人」の数と、③「実際に信頼関係でつながることができる人」や「信頼をもつてつながることができない人」の数の間に（注2）ギャップが生まれているのではないか、そして、このギャップの大きさが、現代に生きる人たち、特に生まれたときからデジタルに囲まれた世界に生きる若者たちの不安につながっているのではないか、そう思うからです。

④人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました。これは、人間の祖先が熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出したことが関係しています。長い歴史のある時点において、おそらく地球規模の寒冷・乾燥化が起こり、それによつて熱帯雨林が分断され、そこで暮らしていた動物たちはサバンナに出て行くか、森が残る山に登るか、低地に散在する熱帯雨林に残るかの選択を迫られたのでしよう。結果的に人間は熱帯雨林を出ました。

そこで、いくつかの特徴を発達させたのです。その一つが集団の大きさです。危険な場所では、集団の規模は大きいほうが有利です。数が多ければ、一人が狙われる確率は低くなるし、防衛力も増します。危険を察知する目がたくさんあれば、敵の発見効率も高まります。

実際、森林ゾウとサバンナゾウでは、サバンナゾウのほうが、身体も大きく、集団規模も大きい。人間も、危機から自分の命、そして仲間の命を守るために、集団の規模を大きくしなければなりませんでした。

ただし、集団を大きくすると、食物や安全な休息場所をめぐってトラブルが増えます。仲間の性質や、自分との関係をきちんと頭に入れおかないとうまく対処できなくなります。そのためには⑤脳を大きくする必要がありました。皆さんの中には、人間の脳は、言葉を使い始めたことで大きくなつたと思つている人いるかもしませんが、人間が言葉を話し始めたのは7万年ほど前にすぎません。一方で、脳が大きくなり始めたのは、それよりずっと以前の約200万年前に遡ります。言葉を使つたから脳が大きくなつたのではないのです。

人間の脳の大きさには、実は集団規模が関係しています。チンパンジーとの共通祖先から分かれた約700万年前から長らくの間、人間の脳は小さいままでした。この頃の集団サイズは10～20人くらいと推定されています。これは、ゴリラの平均的な集団サイズと同じ。言葉ではなく、身体の同調だけで、まるで一つの生き物のように動ける集団の大きさといえます。サッカーが11人、ラグビーが15人など、スポーツのチームを考えるとわかりやすいでしょう。これは、皆さんが、互いに信頼し合つておしゃべりをする友だちの数□に当たります。200万年前、脳が大きくなり始めた頃の集団サイズの推定値は30～50人程度。ちょうど先生一人でまとめられる一クラスの人数ですね。日常的に顔を合わせて暮らす仲間の数、誰かが何かを提案したら分裂せずにまとまつて動ける集団の数です。

その後、人間の脳は急速に発達します。今から約60万～40万年前には、ゴリラの3倍程度の1400ccに達し、現代人の脳の大きさになりました。そして、この大きさの脳に見合つた集団のサイズが、100～150人。これが□に当たる数です。

これは、ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者が、人間以外の靈長類の脳の大きさと、その種の平均的な集団サイズの相関関係から導き出した□カセツに基づく数字です。ダンバーは、平均的な集団サイズが大きければ大きいほど、脳に占める大脳新皮質、つまり知覚、思考、記憶を司る部分の割合が大きいことを明らかにしました。

そして、現代人の脳の大きさに見合つた集団の人数を示す、この「150」という数字は、実際に面白い数字であることがわかりました。

文化人類学者の間で「マジックナンバー」といわれているのはそのためです。

食料生産、つまり農耕牧畜を始める前まで、人間は、この150人くらいの規模の集団で狩猟採集生活を送っていました。天の恵みである自然の食物を探しながら移動生活をする人々には、土地に執着したり、多くの物を個人で所有したりといったことがありません。限られた食料をみんなで分け合い、平等な関係を保つて協力し合いながら移動生活を送るためには、150人が限度なのでしょう。そして、現代でも、このような食料生産をしない狩猟採集民の暮らしをしている村の平均サイズが、実に150人程度なのです。

言い換れば、150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということです。皆さんの生活でいえば、一緒に

に何かを経験し、喜怒哀樂を共にした記憶でつながっている人ということになるでしょうか。ぼくにとっては、年賀状を出そうと思ったとき、リストを見ずに思いつく人の数がちょうどこのくらいです。互いに顔がわかつて、自分がトラブルを抱えたときに、疑いもなく力になつてくれると自分が思つていて人の数ともいえます。

今、ぼくたちを取り巻く環境はものすごいスピードで変化しています。人類はこれまで、農耕牧畜を始めた約1万2000年前の農業革命、18世紀の産業革命、そして現代の情報革命と、大きな文明の転換点を経験してきました。そして、その間隔はどんどん短くなっています。農業革命から産業革命までは1万年以上の年月があつたのに、次の情報革命まではわずか数百年。この四半世紀の変化の激しさを考えれば、次の革命まではほんの数十年かもしれません。その中心にあるのがICT（Information and Communication Technology＝情報通信技術）です。インターネットでつながるようになった人間の数は、狩猟採集民だった時代からは想像もできないくらい膨大になりました。

一方で、人間の脳は大きくなつていません。つまり、インターネットを通じてつながれる人数は劇的に増えたのに、人間が安定的な信頼関係を保てる集団のサイズ、信頼できる仲間の数は150人規模のままだということです。科学技術が発達して、見知らぬ大勢の人たちとつながれるようになつた人間は、そのことに気づかず、（注3）AIを駆使すればどんどん集団規模は拡大できるという幻想に取り憑かれている。こうしたeゴカイや幻想が、意識のギャップや不安を生んでいるのではないか。ぼくはそう考えています。そして、子どもたちの漠とした不安も、このギャップからきているのではないでしようか。

人間はこれまで、同じ時間を共有し、「同調する」ことによって信頼関係をつくり、それをもとに社会を機能させてきました。「同調する」というのは、たとえば、ダンスを踊つたり歌を歌つたり、スポーツをしたり、同じように身体を動かしたり調子を合わせたりしながら共同作業をするということです。

人間のコミュニケーションにおいて大事なのは、時を共有して同調することであり、信頼はそこにしか生まれません。母と子が、何の疑いもなく信頼関係を結べるのは、もともと一体化していたからです。胎児のときは、お母さんの動きを感じつています。そのつながりは、その後、赤ちゃんとして母親の身体の外に出た後、へその緒を切つても残ります。

そして、そのつながりを、音楽や音声、あるいは一緒に何かをするという形で継続しているのが家族や仲間などの共同体です。こうした共同体がもつ文化の底流には、同じような服を着たり、同じテープルを囲んで食事をしたり、同じような歌を歌つたり、同じような作法を共有したりといった、身体を同調させる仕掛けが埋め込まれています。人々はそれを日々感じることで、疑いをもつことなく信頼関係をつくり上げています。信頼は、こうした継続的な同調作用がなければつくれません。

一方、言葉をもつた人間は、言葉で表現しなければ納得できなくなっています。すでに述べたように、脳の発達には、集団サイズが関係

しています。おそらく人の移動が頻繁になり、集団が分裂や統合を繰り返して150人を超える集団が生まれるなどしたときに、言葉を使った情報処理能力が必要になり始めたのでしよう。言葉をもつたからこそ、農耕牧畜が始まって以降、多くの集団が統合されて民族や宗教の大集団が生まれ、数々の王朝や国家などといった規模にまで拡大したのです。

しかし、言葉で表現できるものはごく一部にすぎず、言葉だけで信頼関係をつくることはできません。だから、頭の中では言葉を通じて仲間とつながっていても、身体がつながっている感覚が得られない。逆にいえば、身体でのつながりを得ていないために、言葉にこだわってしまう。「そもそも言葉と身体は一致することがないものである」ということを理解できずに、一致を求めてさまようようになりました。言葉をもつたからこそ集団サイズを大きくできた一方で、その言葉によって、お互いがつながっているという感覚をもつことが難しくなってしまったのです。

さらに、情報通信技術の発達によつて、継続的な身体のつながりで社会をつくるという、人類が何百万年もかけてつくり上げてきた方法が崩壊しかけています。一人一人の人間が、家族や地域などの共同体から引きはがされてバラバラになつたことで、これまで信頼関係で結ばれてきた共同体が機能しなくなつてゐる。インターネットは、継続性だけは保証しました。インターネットで情報を交換し合つていれば、絶えずつながつてゐると思うことは可能だからです。ライン、ツイッターといった（注4）ツールを通じて、時間や空間を軽々と超えて常時つながつてゐる感覚を得るようになりました。でも、それは言葉をはじめとする「（注5）シンボル」を通じてつながつてゐるだけで、身体がつなぎ合わされているわけではありません。

スマホを通じたコミュニケーションでは、ダンスによる同調のように、同時に行うこと、同時に感じることができません。スマホの動画の中で人が動いていたとしても、それは記録されたものであつて生身の動きではありません。たとえそれがライブであつたとしても、自分の都合で止めることができます。記録されたものは、逆に延々と繰り返すこともできます。それは、自分だけの時間だからです。

一方、現実の社会は現在進行形がずっと続いていて、振り出しに戻ることができます。現実というのは、自分の時間であるとともに相手の時間でもあります。そのため、「時間を共有している」という感覚は自分がだけの都合で続けることはできません。いつか終わります。

インターネットでつながることに慣れると、肌^{はだ}で接してゐる現実の世界の自分より、スマホの中には自分のほうが現実性をもつものになつてしまふ可能性があります。なぜなら、現実はなかなか自分の意図するようにはならないからです。思い通りにするには他者と交渉しなくてはいけない。そこでは他者からプレッシャーをかけられて泣くこともあるでしょう。こんな厄介な現実世界より、自分の思い通りになるほうが、居心地^{いざなみ}がいい。スマホの世界は、面白くなればやめればいいし、振り出しに戻つて繰り返すことだつてできます。こういう世界に慣れると、どうしても現実よりスマホの世界にいたくなる。

人間は、適応能力の高い動物です。それでも大人はある程度完成されているので、身体や心を適応させるのが難しい面がありますが、若い人たちの適応能力は非常に高い。とりわけ子どもたちの適応能力の高さには目を見張るものがあります。スマホでのやりとりにもすぐに対応してしまう。生まれたときからスマホが身近にある子どもたちは、自分が操作できるスマホの世界が現実になり、スマホ以外の現実が二の次になってしまう可能性がある。ここにこそB**ぼくの不安**があります。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』より 一部改めたところがある)

(注1) SNS・ラインやツイッターなど、インターネットを介して人間関係を構築できるウェブサービスの総称

(注2) ギャップ：へだたり

(注3) AI：人工知能

(注4) ツール：道具

(注5) シンボル：象徴。かたちのないものをかたちのあるもので表すこと、また表したもの

(一) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ケイエイ b セダイ c ケツコウ d カセツ e ゴカイ

(二) 傍線部①「日常的におしゃべりする友だちは何人くらいますか?」・傍線部②「年賀状や(注1)SNS、メールで年始の挨拶を発信しようと思うとき、リストに頼らず、頭に浮かぶ人は何人くらいますか?」とあるが、それぞれの標準的な回答となる人数は、本文においてどのような意味を持っているか、その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア インターネットでつながるようになった人間の集団の大きさ
- イ 言葉ではなく、身体の同調だけで、一つの生きもののように動ける集団の大きさ
- ウ 誰かが何かを提案したら分裂せずにまとまって動ける集団の大きさ
- エ 人間が安定的な信頼関係を保つことができる集団の大きさ

(三) 傍線部③「「実際に信頼関係でつながることができている人」や「信頼をもつてつながることができている人」とあるが、人間の信頼関係はどうすることで生み出せるのか、そのことを説明したものとしてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア デジタルに囲まれた世界に生きる不安を、スマホを捨てることで取り除くようのこと。
イ 同じ時間を共有し、一緒に体を動かしたり調子を合わせたりする共同作業を継続的に行うこと。
ウ 仲間の性質や自分との関係をきちんと頭に入れて、うまく対処できるようにすること。
エ 限られた食料を分け合い、平等な関係を保つて協力し合いながら移動生活を送ること。

(四) 傍線部④「人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました」とあるが、その理由を説明したものとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 情報通信技術の発達によって、インターネットで多くの人とつながる環境が整つたから。
イ 狩猟採集生活から農耕牧畜生活に移行し、食料生産に多くの人手が必要になつたから。
ウ 危険な場所では仲間が多いほど敵を発見しやすくなり、自分と仲間の命を守れるから。
エ 地球規模の寒冷・乾燥化により人間の祖先がサバンナから熱帯雨林に進出したから。

(五) 傍線部⑤「脳を大きくする必要がありました」とあるが、その理由を説明したものとしてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア チンパンジーとの共通祖先から分かれ、人間は独自の進化を遂げる必要があつたから。
イ 身体がつながつていてる感覺を得られない人間は、高度な言語を使う必要があつたから。
ウ 集団が大きくなると増えてくる、複雑な人間関係にうまく対処する必要があつたから。
エ 農業革命、産業革命、情報革命といった文明の高度な発達に対応する必要があつたから。

(六) 本文に登場する I C T (Information and Communication Technology = 情報通信技術) について、以下の X ～ Z の問い合わせに答えなさい。

X I C T の発達によって人間社会が失いつつあるものは何か、その説明としても最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉による信頼関係
- イ 繙続的な身体のつながり
- ウ 常時つながっている感覺
- エ 言葉と身体の一致

Y インターネットの世界を説明したものとしても最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア インターネットには継続性があり、その記録された情報は何度でも再現できる。
- イ インターネットの世界ではシンボルを通じて共同体同士がつながることができる。
- ウ インターネットの世界でつながる人間の数は、ラインの登場によつて膨大になった。
- エ インターネットのライブ配信は、生身の動きを自分と相手が同時に感じることができる。

Z 現実の世界を説明したものとしても最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現実の世界で時間の共有感覚を得るために、自分と相手の都合を合わせる必要がある。
- イ 現実の世界で民族や宗教の大集団が生まれたとき、人間は言葉で信頼関係を構築していく。
- ウ 現実の世界は現在進行形がずっと続いていて、自分の時間と相手の時間を交換できる。
- エ 現実の世界は時間や空間を超えないが、身体の同調によつて限界を超えることはできる。

(七) 二重傍線部 A 「スマホへの漠とした不安」とあるが、子どもたちの不安の原因を説明したものとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生まれたときからデジタルに囲まれて、現実の世界とインターネットの世界が区別できなくなっていること。
- イ 自分の意図するように動くスマホの世界の方が、複雑な現実世界よりも居心地がよいと感じてしまうこと。
- ウ インターネットを通じてつながれる人数は劇的に増えたのに、人間が信頼できる仲間の数は変わっていないこと。
- エ スマホを使ってゲームや仲間との会話を楽しんでいるように見えて、実はスマホを持て余していること。

(八) 二重傍線部 B 「ぼくの不安」とあるが、筆者の不安を説明したものとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある程度完成されている大人たちと違つて、やつかいな現実世界で何度もやり直してしまって子どもたちの適応能力の高さ。
- イ 子どもたちが、生身の身体ではなくSNSなどを通した身体だけで交流しようとするコミュニケーションのかたより。
- ウ 各言語の共同体がバラバラになつたことで、スマホ以外の現実が二の次になつてしまつて対する子どもたちの無理解。
- エ 子どもたちにとって、思い通りになるスマホの世界の方が身体で接している現実の世界よりも現実性をもつてしまふ可能性。

③ それぞれの文章の内容から確実に正しいと言えることを、後に続くア～ウの中から、記号であるだけ選びなさい。一つも正しいものが無い場合は、「×」と答えなさい。

(一) チョコレートはもともと、私たちが「ココア」として想像するような飲み物のことを指していました。固形のチョコレートが考案されたのは17世紀イギリスのことでした。チョコレートの原料はカカオの種子で、発酵させたりすりつぶしたりと複雑な工程を経て製造されます。昔からカカオは人々に愛好され、アメリカ先住民の間では、カカオがお金の代わりをしていました時期もあったそうです。チョコレートが甘いのはカカオの苦さを消すためであり、昔は砂糖ではなくトウガラシで苦みを消していたこともあるそうです。

- ア 食べ物としてのチョコレートは、飲み物としてのチョコレートよりも歴史が短い。
- イ アメリカ先住民の間では、カカオが高額で取引されていた。
- ウ 甘みよりも、辛みのほうが苦みを打ち消す力が強い。

(二) 貧血とは、血液中の赤血球の中にある、酸素を運ぶ役割のヘモグロビンの濃度が低くなつた状態を指します。起こりうる症状は、立ちくらみ、息切れ、めまい、ふらつき、頭痛、胸の痛みなどです。鉄分が足りないときに起こることはよく知られていますが、葉酸やビタミンB12といった栄養が足りないときにも起ります。赤血球は赤芽球という細胞の分裂から作られるのですが、この分裂を助けるのが葉酸やビタミンB12だからです。血を作る栄養を沢山摂ることは大事ですが、その栄養の吸収を助ける栄養というものもあり、結局のところ、いろいろなものをバランス良く食べるというのが最善となりそうです。

- ア 貧血になつたからといって、頭が痛くなるとはかぎらない。
- イ 鉄分さえ摂つておけば、貧血を防げる。
- ウ 赤芽球は葉酸やビタミンB12からできている。

(三) 私たちは、国にお金を貸すことができます。それが「国債」です。国づくりには莫大なお金がかかるので、昔から国や王様がお金持
ちの住民からお金を借りるということは行われてきました。社会的な取引の中でお金を借りる場合、お金を返すときには利子という報
酬ほうしゅうを付けて返すのが一般的です。絶対にお金を返してくれるという信用がある場合は、利子は少額で済みますが、返してもらえ
るかどうかあやしいという場合は、みんな貸したくなるので、利子が高くなるのが一般的です。日本は他の国と比べても、利子
はかなり安い方です。

ア 国民が国から借金をすることを「国債」という。

イ 社会ではお金を借りたら、返すときの金額はそれより高くなるのが一般的である。

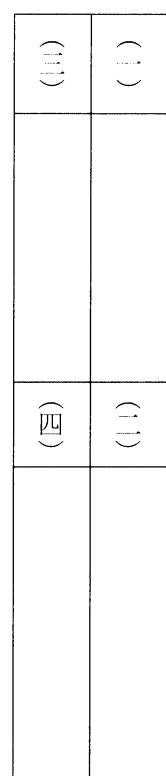
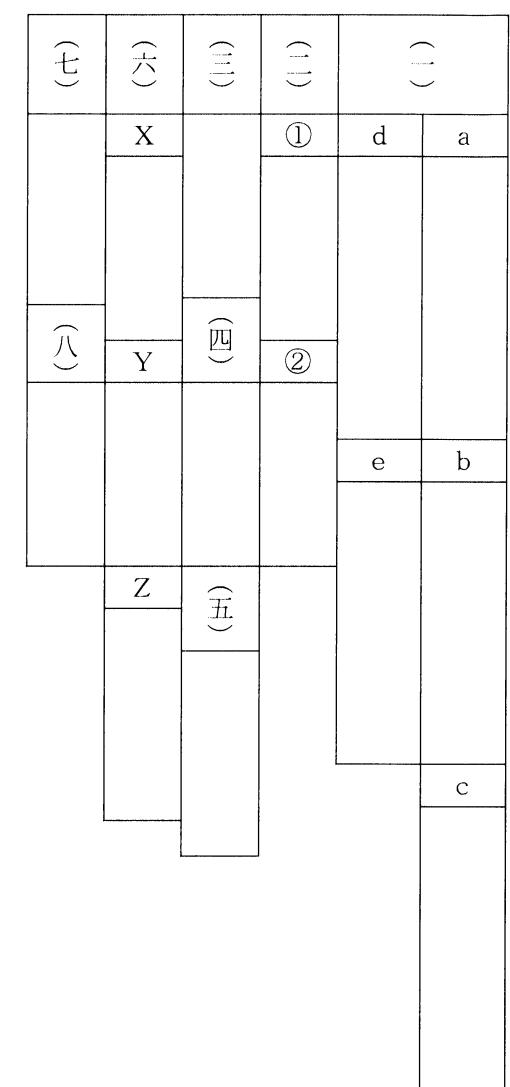
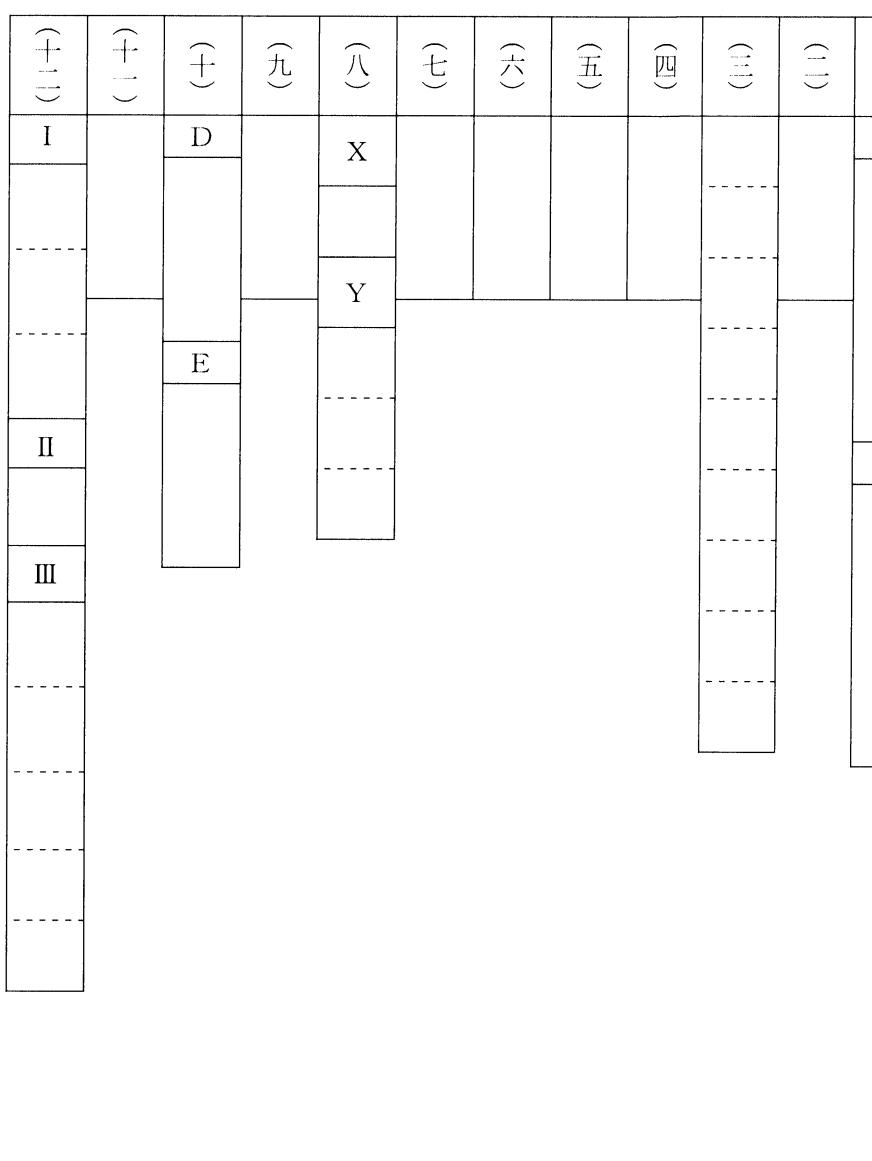
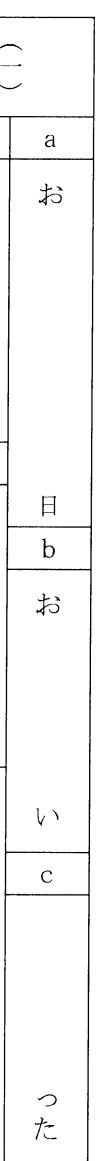
ウ 日本は借りたお金を返すという信用が比較的高いと考えられる。

(四) 見たものを石に変えてしまう、メデューサという怪物がふぞくの話を知っていますか。これに限らず、昔の人は、怪物の視線をとても恐れて
いました。そのため、例えばヨーロッパでは、吸血鬼きゅうけいひきに追いかけられたときには、細かい粒つぶでできている砂や穀物をばらまけばよい
と言われています。吸血鬼がその粒の数を数えだと信じられているからです。日本でも同様のことが信じられており、鬼のわざ
わいから逃れるために、軒先に編み目の細かなかごを置いておく習慣があつたりします。南方熊楠みなみかたくまぬという人は、節分の豆まきも同じ
理由でされるのだと考えました。

ア メデューサの言い伝えは、吸血鬼の言い伝えのもとになつた。

イ 日本の鬼は、細かいものの数を数える性質があると信じられていた。

ウ 南方熊楠は、豆まきの豆の数を鬼が数えるものと考えていた。



得点	
受験番号	

